

高齢者の誤嚥による窒息予防を目指す多施設・多職種が 協働し学び合える研修方法の検討

吉川 志帆¹⁾ 古澤 幸江²⁾ 渡邊 法男³⁾ 宇佐美 利佳⁴⁾ 小嵯 まゆみ⁵⁾ 米増 直美⁶⁾

Training Methods that Enable Collaboration and Learning among Multi-center and
Multi-professional Aiming to Prevent Choking due to Aspiration in Elderly People

Shiho Yoshikawa¹⁾, Yukie Furuzawa²⁾, Norio Watanabe³⁾, Rika Usami⁴⁾,
Mayumi Kozaki⁵⁾ and Naomi Yonemasu⁶⁾

● 要旨 ●

本研究は、A 県内で高齢者の食支援を行う看護職をはじめとした多職種を対象とした研修会を企画・実施し、研修会の参加者への質問紙調査結果をもとに、高齢者の誤嚥による窒息予防を目指す多施設・多職種が協働し学び合える研修方法を明らかにすることを目的とした。研修会は全2回であり、口腔ケアの実演や多職種での意見交流の機会を含む内容とした。研修会の参加者で同意の得られた者を対象とし、無記名自記式質問紙調査を実施した。評定法の部分は単純集計を実施し、自由記述の部分は質的帰納的に内容分析を行った。第1回研修会34名、第2回研修会56名の質問紙調査の結果より、参加者は医療機関などの多施設に所属し、看護職・介護職などの多職種であった。また、回答者の9割が「研修会が自身の学びにつながった」と回答した。参加者の意見より、多分野の講師による講師巡回型グループ研修や、多施設・多職種の参加者との意見交流、専門職による実演や演習は、新たな気づきや包括的・創造的な意見が得られ、各現場での課題解決につながることが示唆された。また、多職種の意見や実践を知ることにより、多職種連携に必要な能力の醸成につながった。今後の課題として、介護者への教育に関する研修の必要性などが挙げられた。

キーワード：高齢者、誤嚥による窒息予防、多施設・多職種連携、質問紙調査、研修方法

受付日：2024年9月8日 受理日：2025年1月24日

- 1) 元岐阜県立看護大学 機能看護学領域 Formor Management in Nursing, Gifu College of Nursing
- 2) 岐阜県立看護大学 機能看護学領域 Management in Nursing, Gifu College of Nursing
- 3) 愛知学院大学 薬学部 臨床薬学講座 Clinical Pharmacy and Sciences, Aichi Gakuin University
- 4) 岐阜県立看護大学 成熟期看護学領域 Nursing of Adults, Gifu College of Nursing
- 5) 羽島市民病院 Hashima City Hospital
- 6) 鹿児島国際大学 看護学部看護学科 Faculty of Nursing, The International University of Kagoshima

I. 緒言

高齢者の食事摂取が誤嚥による窒息の原因とならないようにすることは喫緊の課題であり、食事を摂取することは疾病の治癒や健康の維持のみならず、最期まで自分らしい豊かな人生を送るためにも重要である。摂食嚥下支援においては、単一の職種だけで対応することが困難な場合が多く、多職種が専門的な視点から介入することは非常に有用である（齋藤ら, 2019）。そのため、病院および介護施設において、医師、看護師、介護士などの医療職や介護職が、適切な摂食嚥下を支援するための教育研修体制を充実させることが求められている。しかし、多くの施設においては、看護職・介護職を対象とした食事介助や摂食嚥下訓練に関する教育が不足している現状にある（渡邊ら, 2022）。そこで、高齢者の誤嚥による窒息を予防するため、A県内で高齢者の食を支援している看護職および多職種を対象とした「高齢者の誤嚥による窒息予防を目指す研修会」を2回実施した。

本研究では、研修会の参加者への質問紙調査結果をもとに、高齢者の誤嚥による窒息予防を目指す多施設・多職種が協働し学び合える効果的な研修方法を明らかにすることを目的とする。

II. 研修会の概要

本研修会は、目標を「A県内の高齢者の誤嚥による窒息予防を目指し、現場における食を支援する際の課題解決に向けて、看護職をはじめとした多職種が学習できるよう支援する」「食を支援する多職種が共に学び合う機会を提供し、現場の課題解決に繋げる」とした。

対象者は、A県内で高齢者の食を支援している看護職をはじめとした多職種とした。研修会の案内は、実施会場であるB大学ホームページに案内を掲載するとともに、A県内の一般社団法人日本病院会会員の高度急性期、急性期、回復期、慢性期のいずれかの医療機能を有する病院およびA県公式ホームページの高齢者施設に掲載されている入所定員が100床以上の特別養護老人ホームおよび介護老人保健施設に、案内用紙を郵送あるいはメールにて配布し、参加者を募った。

研修会は全2回実施した。第1回研修会では、口腔ケアに関する講義を15分間実施し、その後に講師

巡回型グループ研修を90分間実施した。口腔ケアに関する講義は、歯科衛生士が口腔ケアの基本的な考え方や注意事項などについて説明を行った。講師巡回型グループ研修は、1グループ12～13人の参加者で構成された3つのグループに対し、摂食・嚥下障害看護認定看護師、歯科衛生士、薬剤師及び医療訴訟を専門とする弁護士の3組の講師が、各グループを巡回する形式で行った。研修時間は1組の講師につき30分間とし、3組で計90分間実施した。グループメンバーの構成は、高齢者の食を支援する職種が、グループ内で各施設の現状について語り合い、交流し、知識を得ながら、課題解決のヒントを得ることを目指し、機能の異なる施設や様々な職種で構成されるよう配置した。また、各グループに、ファシリテーターとして1名の運営スタッフを配置した。内容は、各講師のミニレクチャー及び質疑応答を約15分間、意見交流を約15分間実施した。各講師のミニレクチャーは、介護者への口腔ケア指導や食事の姿勢、薬剤性の嚥下障害や誤嚥による窒息の裁判事例などの説明を行った。意見交流は、各講師の専門分野に関する内容を中心とし、口腔ケアを拒否する患者への対応やトロミ剤を使用した薬剤の内服方法、家族による口腔ケアについての現状などが扱われた。講師や参加者がそれぞれの職種の立場から意見を述べたり、各施設での実践例を共有したりし、活発なグループワークが展開された。

第2回研修会では、歯科医師が歯と口腔の健康に関する講義を30分間行った。また、歯科衛生士が口腔ケアの実演や演習を90分間行った。口腔ケアの実演では、歯科衛生士が参加者に対して口腔マッサージを実施し、その場面をカメラで撮影しスクリーンに投影しながら、口腔マッサージのポイントや注意点について専門的な視点から説明が行われた。演習では、参加者全員が口腔ケアの物品を実際に使用し、スポンジブラシの硬さの違いや口腔保湿剤の効果的な使用方法について体験した。

研修会の開催日時および内容・講師などの概要は表1に示す。

III. 研究方法

1. 調査対象者

A県内で高齢者の食を支援している看護職をはじめとした多職種を対象とした「高齢者の誤嚥・窒

表1 誤嚥・窒息ZERO研修会の概要

開催日時	内 容	方 法	講 師
第1回 令和5年9月16日 9：15～12：30	口腔ケアの基本的な考え方や注意事項について スポンジブラシや口腔保湿剤について	講義	歯科衛生士
	介護者への口腔ケア指導について 食事の姿勢について 抗精神病薬や睡眠薬・抗不安薬の服用により嚥下機能が低下する可能性について 誤嚥による窒息の裁判事例について 食支援における医療従事者の法的責任について など	講師巡回型グループ研修（講師が各グループを巡回し、質問への対応やミニレクチャーを実施した） グループ内での意見交流	歯科衛生士 摂食・嚥下障害看護認定看護師 弁護士 薬剤師
第2回 令和5年12月16日 9：30～12：30	食べる意義について 食べるための口づくりについて 見落としがちな口腔トラブルについて	講義	歯科医師
	口腔マッサージについて 口腔ケア物品の違いについて 口腔保湿剤の使い方について	講義・実演・演習	歯科衛生士
	取り組み状況の報告	参加者の発表	

息ゼロを目指す研修会」に参加した者で、本研究への参加の同意が得られた者を対象とした。

2. 調査方法

第1回、第2回の高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会の終了時に、無記名自記式質問紙調査を実施した。

質問紙調査の項目は、①職種、②所属施設、③研修会の時間の適切性（5件法）、④研修会が自身の学びに繋がったか（5件法）、⑤多施設間で交流する研修会の方法について、良かった点と改善が必要な点について（自由記述）、⑥多職種と交流する研修会の方法について、良かった点と改善が必要な点について（自由記述）とした。第2回質問紙調査では、⑦口腔ケアの実演を取り入れた研修会の方法について、良かった点と改善が必要な点について（自由記述）尋ねる項目を追加した。

3. 分析方法

先述の調査項目について、評定法の部分は、単純集計を実施した。自由記述の部分は、記述内容を精読し、意味内容ごとの文脈に分けて要約し、内容の類似性により質的帰納的に共通性や関連性のあるものを比較、分類しながらカテゴリを抽出した。分析にあたっては、分析内容の妥当性を確保するために、共同研究者間で共通理解が得られるまで協議した。

IV. 倫理的配慮

研修会参加者に、研究の趣旨、研究協力は自由意思であること、個人情報保護、結果公表の可能性と匿名性を遵守することについて、口頭と文書で説明した。本研究は、岐阜県立看護大学研究倫理委員会にて承認を受けた上で実施した（承認番号:0328、2023年7月）。

V. 結果

1. 対象の概要

第1回研修会の参加者は35名、第2回研修会の参加者は57名であった。参加者のうち同意を得られた回答者は、第1回研修会が34名（回収率97.1%）、第2回研修会が56名（回収率 98.2%）であった。回答者の所属施設は医療機関（病棟）が第1・2回ともに最も多く、5割以上であった（表2）。回答者の職種は看護師が第1・2回ともに最も多く、6割以上であった。続いて多い職種は介護福祉士・介護士であり、第1回は11.1%、第2回は16.9%であった（表3）。

表2 回答者の所属施設

所属施設	第1回		第2回	
	人数：名	割合：%	人数：名	割合：%
医療機関（病棟）	19	(51.4)	30	(52.6)
医療機関（外来）	2	(5.4)	2	(3.5)
医療機関（診療所）	2	(5.4)	0	(0.0)
介護老人福祉施設	5	(13.5)	9	(15.8)
介護老人保健施設	4	(10.8)	7	(12.3)
訪問看護ステーション	3	(8.1)	1	(1.8)
歯科医院	0	(0.0)	2	(3.5)
その他	2	(5.4)	6	(10.5)
合 計	37		57	
	(複数回答 3 件)		(複数回答 1 件)	

表3 回答者の職種

職 種	第 1 回		第 2 回	
	人数：名	(割合：%)	人数：名	(割合：%)
看護師	27	(75.0)	37	(62.7)
保健師	1	(2.8)	1	(1.7)
歯科衛生士	1	(2.8)	4	(6.8)
介護福祉士・介護士	4	(11.1)	10	(16.9)
介護支援専門員	1	(2.8)	2	(3.4)
言語聴覚士	1	(2.8)	1	(1.7)
歯科医師	0	(0.0)	1	(1.7)
薬剤師	0	(0.0)	1	(1.7)
生活指導員	1	(2.8)	0	(0.0)
その他	0	(0.0)	2	(3.4)
合 計	36		59	
	(複数回答 2 件)		(複数回答 3 件)	

表4 研修会の時間の適切性

研修会の時間の適切性	第 1 回		第 2 回	
	人数：名	(割合：%)	人数：名	(割合：%)
非常にそう思う	16	(47.1)	29	(51.8)
ややそう思う	13	(38.2)	23	(41.1)
どちらともいえない	4	(11.8)	3	(5.4)
あまり思わない	0	(0.0)	1	(1.8)
全く思わない	0	(0.0)	0	(0.0)
無回答	1	(2.9)	0	(0.0)
合 計	34		56	

表5 研修会による自身の学びの実感

自身の学びにつながったか	第 1 回		第 2 回	
	人数：名	(割合：%)	人数：名	(割合：%)
非常にそう思う	24	(70.6)	44	(78.6)
ややそう思う	7	(20.6)	11	(19.6)
どちらともいえない	2	(5.9)	1	(1.8)
あまり思わない	0	(0.0)	0	(0.0)
全く思わない	0	(0.0)	0	(0.0)
無回答	1	(2.9)	0	(0.0)
合 計	34		56	

2. 研修会の時間の適切性

研修会の時間の適切性では、「非常にそう思う」「ややそう思う」と回答した者は第1回が8割以上、第2回が9割以上であった(表4)。

3. 研修会による自身の学びの実感

研修会による自身の学びの実感では、「非常にそう思う」「ややそう思う」と回答した者は第1・2回ともに9割以上であった(表5)。

4. 多施設間で交流する研修会の方法の評価

良かった点については、第1回研修会の32記述を分析した結果、【多・他施設の参加者との交流が良かった】【グループでの研修が良かった】【悩みを共有できた】【誤嚥による窒息予防についての新たな

知識の獲得ができた】などの6カテゴリに集約された(表6)。また、第2回研修会の21記述を分析した結果、【多・他施設の取り組みが聞けて良かった】

【多・他施設の取り組みや現場での実践を確認できた】【専門職の講義が良かった】【演習(体験)が良かった】【他施設の悩みに共感した】【他施設と情

表6 第1回研修会 多施設間で交流する研修会の良かったこと

カテゴリー (データ数)	記述内容の要約の例示
多・他施設の参加者との交流が良かった(18)	他施設の方と交流する機会が持てて良かった
	病院、在宅、施設などの話が聞けて参考になった
	他施設から見た観点を知ることができた。現場で困っていることがそれぞれ違うことがわかった
	他の病院、施設の参加者とコミュニケーションをとることで、共感できて良かった
	自分の所属している施設以外の問題も知ることができて良かった。視点が色々あるのだと思った
	グループワークで聞いた他の病院で工夫していることなど参考に取入れていきたい
	多施設での口腔ケアや誤嚥予防の方法について話を聞くことができて良かった
	看護、介護の方と交流ができ、色々な意見交換ができた
	現場の意見がたくさん聞けて良かった
	在宅・介護施設・病院での違いについて、色々な現状を知れて良かった
グループでの研修が良かった(4)	他職種の考えや思いが聞けて良かった
	色々な情報が交流できて良かった
	3つのグループに分かれて講師がそれぞれ回って講習を受けることが、すごく貴重で良かった
	グループでの話し合いの場があり、全員が発言できていた
	グループワークで自分が知らない情報を得ることができた
	悩みを共有できた(3)
	同じことで困っていると分かって良かった 悩んでいることが同じであることに安心した
	誤嚥による窒息予防についての新たな知識の獲得ができた(3)
	口腔ケアの重要性、可能性を知ることができた
	完全側臥位法など新しい知識を得ることができた
今後の活動や看護に繋がりたいと思った(3)	最後まで口から食べ続けられるようこれからも活動したい
	法律的に学べたことで改善点がわかり、もっと安心して安全な看護を提供し繋げていけると感じた。本気で看護していきたいと思った
同業種の施設との交流が良かった(1)	同じような介護業界の方の参加もあり、とても良かった

表7 第2回研修会 多施設間で交流する研修会の良かったこと

カテゴリー (データ数)	記述内容の要約の例示
多・他施設の取 り組みが聞けて 良かった (7)	多施設の取り組みについて知ることが出来た 他施設の取り組みを知る事ができた 各施設の取り組みや現状がわかって良かった
多・他施設の取 り組みや現場で の実践を確認で きた (3)	多施設の取り組みを聞く事ができ、実際に 受けた研修がどう活かされているかを知る 事ができた 多くの施設の現状を知る事が出来た。他の 施設も一緒にケアの質が上がっていくこと が目に見えて理解できた
専門職の講義が 良かった (3)	歯科医師や歯科衛生士の貴重な講義を受け られて良かった
演習(体験)が 良かった (2)	体験することで口腔ケアの効果がわかった
他施設の悩みに 共感した (1)	どこの施設も同じような悩みを持っている と共感できた
他施設と情報共 有する大切さを 知った (1)	病院以外の取り組みを知ることができ、情 報共有の大切さを知ることができた
他施設の視点が 参考になる (1)	自施設だけでは考え方が固まってしまうこ とに改めて気づくことができた。別の視点 での意見は参考になる
取り組みを職場 で広げたいと感 じた (1)	活動、取り組みについて知り、自分も職場 に広げていきたいと感じた
学びが多く今後 のケアに活かせ る (1)	学びが多く、今後のケアに繋がる
質問メモの活用 が良かった (1)	質問が紙で書きやすい

表8 第1回研修会 多施設間で交流する研修会の改善が必要なこと

カテゴリー (データ数)	記述内容の要約の例示
音声聞こえに くい (4)	少し声が聞き取りにくいことがあった グループが遠くて話が聞こえづらかった
時間が短い (2)	もう少し時間があっても良かった
名札に職種等を 記載してほしい (1)	参加者名札に職種・業務内容がわかるよう にしたほうが良い
自分の意見が尊 重されづらかつ た (1)	他施設の質疑応答で自分の意見が埋もれて しまった
グループ編成を 業種別にしてほ しい (1)	業種別にグループを分けると、苦労や工夫 している部分を共有できたと思う
介護施設に研修 情報を流してほ しい (1)	介護施設関係にも広く研修の情報を流して ほしい
他の地域で研修 会を開いてほし い (1)	学びたい職種の方は大勢いると思うので、 他の地域に来て研修を行ってほしい
講師の負担が大 きい (1)	グループワークにて講師が同じ内容を3回 話すため、講師の負担が大きいと感じた

報共有する大切さを知った】などの10カテゴリに集約された(表7)。改善が必要な点については、第1回研修会の12記述を分析した結果、会場の音響や研修会の時間の改善点、グループ編成に関する要望などの8カテゴリに集約された(表8)。また、第2回研修会の9記述を分析した結果、研修会の時間や運営に関する改善点、参加者同士の交流や参加者の取り組みについての発表の要望などの5カテゴリに集約された(表9)。

表9 第2回研修会 多施設間で交流する研修会の改善が必要なこと

カテゴリー (データ数)	記述内容の要約の例示
交流がなかった (4)	特に交流する機会はなかった 今回は意見交換の場面がないため評価できない
時間が短い (2)	時間がもっと欲しい
ワークショップ 形式にすると沢 山質問ができて よい (1)	質問が多いので、ワークショップ形式で質 問や疑問をたくさん出して、参加者で答え を出すようにしていくとよい
参加者同士の交 流があるとよい (1)	参加者同士がもっと交流できる機会があると 良い
参加者の過去の 取り組み発表を 中心にするとよ い (1)	今までの研修の参加者の取り組み内容の発 表を中心に行ってもいい

5. 多職種間で交流する研修会の方法の評価

良かった点については、第1回研修会の22記述を分析した結果、【多・他職種の参加者との交流が良かった】【多分野の講師の講義が良かった】【少人数での研修が良かった】【新しい知識を得ることができた】【各施設の課題がわかった】【参加者と情報交換ができた】などの7カテゴリに集約された(表10)。また、第2回研修会の17記述を分析した結果、【多・他職種の考え方や実践を知ることができ視野が広がった】【知識を得ることができた】【他施設の活動が分かり良かった】【多方面で知識や経験談が聞けて良かった】【介護と看護の視点の違いと共通点を認識できた】などの7カテゴリに集約された(表11)。改善が必要な点については、第1回研修会の12記述を分析した結果、研修の時間や進行の改善点、グループ分けに関する要望などの6カテゴリに集約された(表12)。また、第2回研修会の10記述を分析した結果、研修会の運営に関する改善点や、

表10 第1回研修会 多職種間で交流する研修会の良かったこと

カテゴリー (データ数)	記述内容の要約の例示
多・他職種の参加者との交流が良かった(9)	様々な職種の意見を聞くことが出来て良かった
	職種の違う参加者の話・意見が参考になった
	それぞれの職種の専門的な視点からの発言があり、とても参考になった
	いろいろな立場の職種の参加者の仕事ぶりがわかり、志の高い方々に触れることができた良かった
	普段多職種と話す機会が無いため、多職種の参加者との交流によって、考え方や視点が色々あると思えたので良かった
	色々な方の話を聞けることは大切なことで、困っていることは一緒だなと思った
多分野の講師の講義が良かった(7)	病院、施設、在宅、急性期、回復期、療養などの意見、取り組み、問題点が聞けて良かった
	薬剤師や弁護士の話を開けたのが面白かった。なかなか関わるのがないのでたくさん聞けて良かった
	歯科衛生士、看護師、介護、在宅、特に弁護士、薬剤師の意見が聞けて良かった
	普段関わりの少ない薬剤師や弁護士のレクチャーも受けることができて良かった
	専門性の知識を聞くことができて知識を深めることができた
少人数での研修が良かった(2)	それぞれの職種の視点から口腔ケアについて学ぶことができて良かった
	小単位のグループになって、交流できて良かった
	少人数制で良かった
自分自身では気付かなかった視点到に気付いた(1)	一人では思いも考えもつかなかった事に気付いた
新しい知識を得ることができた(1)	完全側臥位法など新しい知識を得ることができた
各施設の課題がわかった(1)	各施設の色々な課題を見ることができた
参加者と情報交換ができた(1)	多くの方と情報がシェアできて良かった

参加者同士の交流についての要望などの4カテゴリーに集約された(表13)。

6. 口腔ケアの実演を取り入れた研修会の方法の評価
良かった点については、第2回研修会の44記述を分析した結果、【実演や演習により、口腔ケア方法を学ぶことができた】【口腔ケアの感覚を体験できたことで、利用者の視点に立った新たな理解を得た】【口腔ケアの演習がよかった】【実演をプロジェクターに投影したことがよかった】などの8カテゴリーに集約された(表14)。改善が必要な点については、

表11 第2回研修会 多職種間で交流する研修会の良かったこと

カテゴリー (データ数)	記述内容の要約の例示
多・他職種の考え方や実践を知ることができ視野が広がった(5)	他職種の参加者が関わり方や視点を教えて下さり、視野が広がった
	多職種の講師からの視点で講義を聞くことができ、大変学びになった
	それぞれの立場の知識や経験からの意見や考え方、思いについて知る事ができ、刺激になった
知識を得ることができた(5)	知らなかった口腔ケア方法を学べた
	違う視点での知識を学べた
他施設の活動が分かり良かった(2)	看護師や歯科衛生士がどのように考えているかを感じることができて良かった。実際に誤嚥性肺炎の予防での口腔ケアでどのようなことを行っているのかを具体的に知ることができたので良かった
	他施設の活動が聞けて良かった
多方面で知識や経験談が聞けて良かった(2)	多方面で知識や経験談が聞けて良かった
エビデンスに基づいたケアができるようになり質向上につながると思う(1)	日頃漠然と行われているケアをエビデンスに基づいて正しく行うことができるようになり、質の向上につながると思う
介護と看護の視点の違いと共通点を認識できた(1)	介護と看護の視点の違いと共通点を認識できた
勉強しやすい環境だった(1)	席が自由で、勉強しやすい環境だった

表12 第1回研修会 多職種間で交流する研修会の改善が必要なこと

カテゴリー (データ数)	記述内容の要約の例示
時間が短い(4)	時間的な制限があるため、交流までできなかった
	もう少し時間を取ってグループディスカッション等できたら良かった
グループメンバーの分け方を変えてほしい(3)	同じような悩みを持った人が集まった方が、焦点に合った話が聞けたのではないかと在宅分野の参加者の話をもっと聞きたかった
グループの進行を改善してほしい(2)	質問が多岐にわたるので、進行が大変だと思った
少人数のグループにしてほしい(1)	もう少し少人数の方が、活発な意見交流となったかと思う
参加者の職種がわかるとよい(1)	誰が何の職種なのか分からないため、多職種の交流だと意識できなかった
事前に資料を開示してほしい(1)	資料を事前にメールで開示してほしい

表13 第2回研修会 多職種間で交流する研修会の改善が必要なこと

カテゴリー (データ数)	記述内容の要約の例示
交流できるよい (6)	意見交換会もできるとうれしい
	参加者同士がもっと交流できる機会があると良い
参加者の職種が わかるとよい (2)	職種がわかるように名札などがあると良いと思った
テーマを絞ると よい (1)	ケアを学ぶ場か、多職種と交流の場とするか、テーマを絞る方が時間的余裕が生まれると思う
カメラが見にく い (1)	演習でのカメラの映像が見にくかった

表14 第2回研修会 口腔ケアの実演を取り入れた研修会の良かったこと

カテゴリー (データ数)	記述内容の要約の例示
実演や演習によ り、口腔ケア方 法を学ぶことが できた (14)	実際に演習することで、歯磨きの方法や口腔 ジェルの使い方を知ることができた
	自分の普段のケアの方法を見直すことができ た
	演習することで取り組み方や難しさが分 かった
	実演を見ることで、歯科衛生士のケア方法 を学ぶことができた
口腔ケアの感覚 を体験できたこ とで、利用者の 視点に立った新 たな理解を得た (10)	自分自身で体験してみて、口腔ケアを受け る側の感覚が知ることができた
	不快、爽快が理解できてよかった
	利用者の気持ちになってケアでき、良かった
口腔ケアの演習 がよかった (7)	自分で見て、自分でやるというのはわかり やすい
	今まで見ていただけだった口腔ケアについ て、演習させてもらえて良かった
口腔ケアについ て学ぶことがで きた (4)	口腔ケアの正しい方法を学べた
わかりやすかつ た (3)	わかりやすかった。もっと聞きたいと感じ た
実演をプロジェ クターに投影し たことがよかつ た (3)	実演をカメラで撮影し、プロジェクターに 写したことがよかった
現場で役立つ (2)	現場で役立つ情報がもらえたので良かった
効果がすぐに確 認できた (1)	効果がすぐにわかった

表15 第2回研修会 口腔ケアの実演を取り入れた研修会の改善が必要なこと

カテゴリー (データ数)	記述内容の要約の例示
時間調整が必要 である (8)	もっと時間が欲しい
	もう少しゆとりがあると良かった
カメラの映像が 見づらかった (4)	映像が少し見づらかった
会場の環境を検 討してほしい (2)	実演を（カメラの映像ではなく）実際に円 で囲んで見たかった
開催時期を検討 してほしい (2)	感染症対策のため、開催時期は冬以外がよ い
参加者相互での 演習を検討して もよい (2)	二者でお互いに口腔ケアを体験すると良い と思う
参加者相互での 演習は困難であ る (1)	（演習で）他人に口を見せるにはかなり勇 気が必要だと思う
動画の活用を検 討してほしい (1)	演習が良く見えるよう動画を撮り、説明し ながら当日流してもらえるとより良い
物品の準備を検 討してほしい (1)	ティッシュなどの物品があると良かった

第2回研修会の21記述を分析した結果、研修の時間や実演の改善点、開催時期に関する要望などの8カテゴリに集約された（表15）。

VI. 考察

第1・2回研修会の参加者は、医療機関、介護・福祉施設、在宅医療、福祉機関などの多施設に所属し、看護職、介護職、言語聴覚士、歯科衛生士などの多職種が参加していた。高齢者の食支援に関わる多施設・多職種において、学びのニーズが存在していることが示唆された。

さらに、第1・2回研修会ともに9割以上の参加者が「研修会が自身の学びにつながった」と回答しており、食を支援する多職種に学ぶ機会を提供できたと考える。

参加者からは、看護・薬剤・歯科・法律分野の講師による講師巡回型グループ研修への肯定的な意見が多く寄せられた。取分け、薬剤師と弁護士は講師に対し、普段の実践では関わる機会の少ない薬剤師や弁護士の講義が良かった、などの機会の貴重さに対する意見が挙げられていた。多くの病院・介護施設では、看護職・介護職への嚥下機能に影響を及ぼす薬剤に関するOff The Job Trainingおよ

びOn The Job Trainingが実施されていない現状(渡邊ら, 2022)がある。そのため、今回の薬剤師による抗精神病薬や睡眠薬・抗不安薬の服用により嚥下機能が低下する可能性に関する講義によって、参加者が薬剤に関する知識を新たに獲得する機会となった。さらに、食支援の研修会において、医療職の講師に加え、医療訴訟を専門とする弁護士が講師として参加した事例報告はない。法律分野の視点での学びの機会を提供し、医療事故の判例を通じて食支援における医療従事者の法的責任を再確認することで、安全な看護や介護を提供するための実践へとつながると考える。

また、グループ研修における参加者同士の意見交流では、多施設・多職種参加者が抱える課題や現状についての共有を行ったことで、他施設から見た観点を知ることができた、現場で困っていることがそれぞれ違うことがわかったなど、新たな視点での気づきを得ることにつながった。また、講師も意見交流に加わり、専門的視点からの助言や問題提起を行ったことにより、専門的な知識を深めることができた、知らない情報を得ることができたなど、新たな知識の獲得につながった。このように、講師巡回型グループ研修は、新たな気づきや包括的・創造的な意見が得られ、各現場での課題解決につながることが示唆された。

多職種連携コンピテンシーの一つに職種間コミュニケーションがあり、職種背景が異なることに配慮し、互いに、互いについて、互いから職種としての役割、知識、意見、価値観を伝え合うことができる能力が重要であるとされている(多職種連携コンピテンシー開発チーム, 2016)。また、現場では保健・医療・福祉領域を横断しコミュニケーションをとる機会が増えているが、自分が所属する専門領域以外の分野は異文化となり、コミュニケーションの障壁を感じていることが報告されている(春田, 2016)。本研修会は、普段の業務では関わるのが少ない他施設・他職種との交流の機会を提供し、多施設・多職種の意見や実践を知ることによって、職種間の考え方の違いや共通点を認識でき、多職種連携に必要な能力の醸成につながった。また、参加者の過去の実践的な取り組みを知りたいという意見が挙げられていたことから、研修会で参加者の実践発表や意見交流の機会を設けることで、職種間の相互理解が深まる

ことが期待される。

第2回研修会で実施した口腔ケアの実演を取り入れた研修についても、肯定的な意見が多く寄せられた。講師の口腔ケア技術を観察して学んだり、口腔ケア物品を参加者自身で体験したりすることで、患者や利用者が口腔ケア時に受ける感覚を知る機会となり、苦痛の少ないケア方法を学ぶ機会になったと考える。今後は、講師巡回型グループ研修と専門職による実演や演習を併用することで、さらに誤嚥による窒息予防に関する学びを促進させていくことが期待される。

一方、研修会のテーマとして、同業種や同じ悩みを持つ参加者との交流の機会を望む声が寄せられた。同業種の交流は、直面している課題や問題について互いに理解しやすいため、より具体的で専門的な議論が可能である。また、同じ悩みを持った参加者の交流はピアサポート効果でストレスが軽減されることも考えられる(平川, 2014)。このようなテーマを中心とした研修会の企画も今後検討が必要である。

また、研修会の運営について、グループの進行や研修会の時間配分、実演や演習の運営について改善を求める意見が挙げられた。限られた研修会の時間の中で、多様な背景やニーズを持つ参加者の交流を活発化させるためには、運営者のファシリテーション技術の向上が求められる。また、医療従事者が多く参加することを配慮し、感染症の流行を考慮した開催時期の検討を行うことで、より安心で充実した口腔ケアに関する演習の実施が可能となる。

さらに、食支援に関する技術向上のみならず、在宅で高齢者の食を支える介護職や介護者らが適切に摂食嚥下を支援できることも、近年の重要な課題である。主介護者に対して摂食・嚥下機能に関する具体的な介護方法を教育していく必要がある(松田, 2003)ため、保健・医療・福祉施設と在宅との連携強化に加え、専門職を対象とした、介護者らに対する教育についての研修も必要である。

VII. 結論

高齢者の誤嚥による窒息予防を目指す多施設・多職種が協働し学び合える研修方法として、多分野の講師による講師巡回型グループ研修や、多施設・多職種の参加者との意見交流、専門職による実演や

演習は、新たな知識の獲得効果や職種間の相互理解が促進される効果が得られることが示唆された。今後の課題として、参加者のニーズに合わせた研修内容の設定や、運営者のファシリテーション技術の向上、介護者への教育に関する研修の必要性が挙げられた。

本研究は、岐阜県立看護大学「看護実践研究指導事業」の助成を受けて実施した。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

文献

- 春田淳志. (2016). 多職種連携コンピテンシーの国際比較. 保健医療福祉連携, 9(2), 106-115.
- 平川仁尚. (2014). 高齢者ケアに関する職種横断型ワークショップ活動報告. 日本農村医学会雑誌, 63(1), 76-82.
- 松田明子. (2003). 在宅の摂食・嚥下障害者をもつ主介護者に対する教育効果. 日本摂食嚥下リハビリテーション学会誌, 7(1), 19-27.
- 齋藤真由, 北澤浩美, 長谷川士朗. (2019). 摂食嚥下障害患者への包括的介入を目的とした多職種によるチームの設立と活動の報告. 老年歯学, 34(1), 101-111.
- 多職種連携コンピテンシー開発チーム. (2016). 医療保健福祉分野の多職種連携コンピテンシー. 2024-4-21.
https://www.hosp.tsukuba.ac.jp/mirai_iryoku/pdf/Interprofessional_Competency_in_Japan_ver15.pdf
- 渡邊法男, 古澤幸江, 宗宮真理子ほか. (2022). 岐阜県内の病院・介護施設における摂食嚥下支援体制の現状と課題. 日本農村医学会雑誌, 70(5), 485-497.